

消えゆく歴史を追い、 未来へと発展させていくための糸口を探る



◆略歴◆

- 1989年 北京大学哲学部卒業
- 1998年 日本へ留学
- 1999年 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程進学
- 2001年 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了 修士(学術)
- 2006年 同研究科博士後期課程修了 博士(学術)
- 2008年 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会外国人特別研究員
- 2012年 ケンブリッジ大学招聘研究者
- 2013年 昭和女子大学人間文化学部准教授
- 2016年 昭和女子大学人間文化学部教授
- 2021年 昭和女子大学大学院生活機構研究科教授

昭和女子大学大学院生活機構研究科 教授
公益財団法人 守屋留學生交流協会 第18回奨学生

ボルジギン・フスレ

に漢人、満洲人、朝鮮人など、さまざまな民族が居住しており、お互いに何民族であるかを問うのはごく普通のことでした。学校に進学する時や何かを申請する時など、登録あるいは提出する書類には必ず「民族」という項目が設けられています。民族意識の高揚は、さまざまな要素によりますが、内モンゴルではこうした社会状況のなかで、人々は自然に「民族」という意識を強くもつようになるのです。

近現代の内モンゴルの歴史・社会・経済・文化などにおいて日本の影響が大きかったということ、小学校5年生の時、モンゴルの文学・民俗を研究している父から教わりました。そして、中学に入った時から、私は日本語を独学で学びはじめ、大学でも第一外国語として日本語を選択しました。北京大学では、「文化熱(文化ブーム)」「反精神汚染運動(ブルジョア精神汚染批判キャンペーン)」「天安門事件」という激動の時代を経験しました。

大学卒業後、私は内モンゴル大学芸術学院の講



※ノモンハン・ブルド・オポー：境界線を示すオポー(堆石)の一つ。

師として、「近現代ヨーロッパ哲学・芸術・文化思想」などの講義を担当しました。講義のかたわら、モンゴルの英雄叙事詩『ゲセル』『ジャンガル』などを素材に、モンゴルの文化・宗教・歴史などについて研究していました。そして、研究を進めるなかで、1930年代から第二次世界大戦の終結までの歴史を、日本人と内モンゴル人が互いに「共有」したことに気づきました。モンゴルをめぐる北東アジアの歴史を再構成することによって、きっと新たな成果が生まれるはずだと信じて、イデオロギー上の制約がなく、かつ研究の蓄積のある日本に留学することを決めました。

◆日本での研究生活◆

私は1998年4月に来日し、翌1999年に東京外国語大学大学院に進学しました。大学院では、北東アジアの枠組みから、近現代モンゴルの民族自決・自立運動と中国、日本、ロシアの対応に関心を持ちながら、「中国国民党・共産党の対モンゴル政策——民族主義運動と国家建設との相

◆はじめて◆

「あなたは何民族ですか？」幼い頃から当たり前のように、こう質問されてきました。というのは、私が中国内モンゴル自治区出身のモンゴル人だからです。清朝半ば以降、さまざまな人々が絶えず移住し続けてきた結果、20世紀の内モンゴルでは、モンゴル人はすでに少数になっていました。私の少年時代、まわりには、モンゴル人のほか

「克」をテーマに、修士論文、博士論文を執筆しました。その間、1999～2001年には、守屋留学生交流協会の奨学金をいただきました。当時、2か月に一度、奨学金が交付されました。奨学金が交付される日は、私はいつも昼には神保町の古本屋をまわり、好きな本を購入しました。その後、日本の歴史と文化、自然に触れられる皇居まで散策し、体も心も癒されたものでした。夕方になると、帝国書院を訪れ、奨学金の交付会に参加したことを、今でも懐かしく思い出します。

◆東アジアの国際関係を見直す◆

歴史認識や資源の利用、領土問題などをめぐって、東アジアに限らず、世界中で、国家、地域間の対立が激しくなっています。視点さえ変えれば、これらの問題から、国際政治の力関係の原点や対立を乗り越えるための糸口を見つけることも可能です。

博士号を取得した後、私はモンゴルと中国、日本、ロシアの近現代史の接点となる諸問題の探求を課題としてきました。主に、モンゴルをめぐる



ハルハ河・ノモンハン戦争の調査をしている筆者（左側）（モンゴル国ドルノド県ネメルグ草原、2012年8月）



チンギス・ハーンの長城：オールドゲルティーン・ゴビーン・ヘルム遺跡（モンゴル国ドルノド県チヨイバルサン郡、2021年9月）。この長城は、遼、西夏、金の三時代にわたって作られたといわれており、複数の防壁などと城壁によって構成されている。ここを発掘調査する。

国際関係、1939年のハルハ河・ノモンハン戦争（ノモンハン事件）、第二次世界大戦のアジアでの終結と日本人のシベリア・モンゴルへの抑留に焦点を当て、歴史資料の発掘と研究に取り組んでいます。また、「チンギス・ハーンの長城」や「匈奴帝国の単于庭^{だんうてい}、龍城」といった国際共同研究プロジェクトも立ち上げました。その中で、日本とモンゴル、中国を拠点に、ロシアやイギリス、台湾などの国や地域まで足を運び、興味深い歴史記録、遺跡などを新たに発見したり、いろいろな人に話を伺ったりしています。

こうした研究成果を社会に還元しなければと思いい、意見交換の意味もこめて、30回を超える国際シンポジウム、フォーラムを企画し、各国の研究者を招きました。国際会議の論文集をふくめ、編著書を20冊余り出版しましたが、なかなか追いつきません。学問には終わりがありません。

さらに、学問に対する関心を若い世代に喚起するため、日本・モンゴル青年フォーラムを組織し、多くの大学院生や学生に参加してもらってきました。指導した学生たちが課題をやり遂げ、達成感

を得ているのを国際交流の場で見るのは、本当にうれしいものです。

◆モンゴルと日本の架け橋として◆

去る2022年は、日本モンゴル外交関係樹立50周年であり、チンギス・ハーンの生誕860周年でもありました。私は監修者として、日本モンゴル外交関係樹立50周年記念プロジェクト、日本国立公文書館とモンゴル国公文書管理庁共催展示会「日本とモンゴル——綴られた交流のあゆみ——」*に携りました。アーカイブ（公文書）は歴史の記録であり、人類の知的財産です。長い歴史の間、日本とモンゴルは、複雑で密接な関係を持ってきました。日本の国立公文書館とモンゴル国公文書管理庁の職員は、2年以上も前からこのプロジェクトに着手し、準備を重ね、2022年2月24日、すなわち日本モンゴル外交関係樹立50周年の日に同展示会の開会式を迎えました。この展示会では、13世紀から今日にかけての日本とモンゴルの交流の歴史を、精選された両国のアーカイブで綴っています。歴史の対立を乗り越えた日本とモンゴルの経験から何が得られるかを考える本展示会が、今日の国家、地域間の対立、それらめぐるナショナルリズムなどの問題の解決において社会的インパクトを与えること、また、将来、世界各国、各民族の友好と平和の構築に大いに寄与することを願っています。

これからも、モンゴルと日本をはじめ、東アジアの国々が互いの歴史への認識を深め、友好的な関係を築いていけるよう、その糸口を探し続けたと思います。

* https://www.archives.go.jp/about/activity/international/jp_mn50/index.html (2023年5月8日閲覧)